12 月第 3 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 12 月 17 日（日）10：30～11：30　待降節第 3 主日
■説　教： 保科けい子牧師
■説教題：「主の道をまっすぐに 」
■聖　書　新約：ヨハネによる福音書 1 章 19～28 節（新約 p163～164）
■讃美歌：231「 久しく待ちにし」
　　241「 来たりたまえ われらの主よ、」

昨日 12 月 16 日の土曜日は、12 月にしてはとても温かい日になりました。私は昼頃に、ルイス緑さんのご夫君であるルイス・エリック カールさんとそのお母様のルイス・シャーリー アンさんの納骨に伺いました。讃美歌 21 の 451 番を「アメージンググレイス・・・」と英語で歌う声と「くすしきみ恵み・・・」と日本語で歌う声が一つとなり、和やかな雰囲気の中で納骨することができました。待降節を過ごしている中で、私たちの身近なところにある「死」というものに向き合うことができ、大切な方を突然失ったご家族がやっと納骨をするところまで立ち直って来られたことを思い、主なる神様の慈しみを感謝するひと時でした。

ところで、先週の説教でも申し上げましたが、今年の待降節に選ばれている日本基督教団の聖書日課は、みどりごとしてこの世に降誕された主イエス・キリストを待ち望むというよりは、やがて時至って再びこの世に来臨される主イエス・キリストを待ち望むという観点から、聖書の箇所が取り上げられているという印象を受けます。本日の箇所に記されている「洗礼者ヨハネの証し」なども、クリスマスのページェントなどではあまり演じられることはありません。ページェントの中で取り上げられる洗礼者ヨハネと言えば、ルカによる福音書 1 章で記されている父ザカリアや母エリサベトに焦点を当てた彼の誕生にまつわる出来事です。そこでのヨハネの父ザカリアの預言は来週取り上げたいと考えています。そういうわけで、先週もお話ししましたが、今年の待降節は、2000 年前の救い主の誕生をファンタジーとしてお祝いするという方向への道筋が示されているのではなく、私たちが今置かれている現実をしっかり見つめながら、必ずこの世界に救い主が再び来られるという確かな希望を新たにされる方向へと道筋が示されているような思いがいたします。

さて、本日の聖書箇所ヨハネによる福音書 19 節から 28 節の洗礼者ヨハネは、既に成長してヨルダン川の向こう側のベタニアで、洗礼を授けるという運動をしていました。おそらく 30 歳前後になっていたと思われます。既に、ヨハネによる福音書 1 章 6、7 節に彼のことが語られています。「6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネ

である。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。」。これがヨハネによる福音書における洗礼者ヨハネの位置づけです。そして、本日の箇所の冒頭の 19 節には、「さて、ヨハネの証しはこうである。」と書き出されています。ヨハネがどういう証しをしたのかがこの 19 節以下に語られていくわけです。注目したいのは、彼は祭司やレビ人たちから「あなたはどなたですか」と問われていることです。他の三つの福音書によれば、彼は人々に罪の悔い改めを求め、悔い改めて神に立ち帰ることのしるしとして洗礼を授けていたのです。つまり彼が授けていた洗礼は、人々と神との関係を正しく整えることを意味していたわけで、神から遣わされた者としての権威がなければできない大それたことだったのです。ですから、エルサレムから遣わされて来た人々は、「お前はどのような権威があって、そんな大それたことをしているのか」という思いを込めて尋ねているのです。彼らは、本当は「お前はいったい何者だ」と厳しく問い詰めていたのです。それに対してヨハネは、「わたしはメシアではない」から始まり、「エリヤでも、あの預言者でもない」と答えたのです。当時「あの預言者」といえば、「モーセのような預言者」のことを指していたと思われます。つまり、ヨハネはここで自分自身のことを人々の期待する者ではないと断言したうえで、イザヤ書 40 章 3 節の「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」という言葉を引用して、はっきりと自分のことを説明したのです。洗礼者ヨハネの出現がイザヤ書 40 章の預言の成就であることは、他の三つの福音書も共通して語っています。しかし、ヨハネ自身が「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。」と語っているのはこのヨハネ福音書のみです。ヨハネはそのことを自覚して、その「声」であることに徹して生きたのだ、とヨハネによる福音書は語っているのです。それはヨハネ自身が証しのために生きた、ということです。ヨハネが、私はメシアでもエリヤでもあの預言者でもない、救い主ではないし神による救いをもたらす者でもない、私はただ「主の道をまっすぐにせよ」と叫ぶ声だと語ったことによって、そのまっすぐな道をやって来られるお方がいるのだと、主イエス・キリストを証ししたのです。

26 節以下には、救い主でも救いをもたらす者でもないあなたがなぜ洗礼を授けるのか、と問いつめる人々にヨハネは「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」と答えます。あなたがたの知らないまことの救い主が既に世に来ておられる、私はその方のための備えをしているのであって、その方の履物のひもを解く値打ちもない者だと断言することによって、主イエス・キリストを指し示しています。「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。」と自分自身のことを語っていながら、実は自分のことではなくて主イエスのことを指し示し、主イエスこそが救い主であられることを証ししている、それがヨハネの証しだったのです。そして、ヨハネの生

涯は、「主の道をまっすぐにせよ」とのイザヤ書の御言葉を語り続けながら、まず彼自身がそのような生き方を彼の人生の最後までひたすら貫いたものであった、ということができると思います。

私たちは主イエス・キリストを証しようとするとき、いつでも主イエス・キリストによって救われた私、今も愛されている私を語ろうとします。しかしその時、私を通して本当に主イエス・キリストの十字架が現れているでしょうか。私自身はその逆で、むしろ主イエス・キリストの十字架を後ろに押しやり、隠してしまっていることに気づかされています。待降節、それはわたしたちにとっても「主の道をまっすぐにせよ」という御言葉を静かに聞き、今一度そのような生き方に徹する思いを与えられる時だと思います。今週一週間、そのような時として過ごしてまいりましょう。

★立川教会の「クリスマス礼拝」は１２月２４日（日）の午前１０時３０分からです。
蝋燭を灯しての「クリスマスイブ礼拝」は１２月２４日（日）の午後７時からです。
どちらの集いにも、どうぞお出かけください。